

2015 年度私立大学図書館協会海外派遣研修  
イリノイ大学図書館モートンソンセンターアソシエーツ・プログラム  
および アメリカ図書館協会 (ALA) 年次大会 参加報告書

2015 年 11 月 1 日  
早稲田大学図書館 資料管理課  
藤 順一

## 本報告書の構成

1. はじめに
2. 研修参加の目的と設定課題
3. モーテンソンセンタープログラムの概要
4. モーテンソンセンタープログラム受講内容に関する報告
5. アメリカ図書館協会（ALA）年次大会参加に関する報告
6. おわりに

### 1. はじめに

私立大学図書館協会の海外派遣研修制度を利用して、2015年5月28日から6月23日までの期間、アメリカ合衆国イリノイ州にあるイリノイ大学アーバナ・シャンペーン校図書館モーテンソンセンターにおけるアソシエイト・プログラムを受講し、また6月25日から30日までの期間でカリフォルニア州・サンフランシスコで開催されたアメリカ図書館協会（ALA）年次大会へと参加させて頂いた。

本報告書では、モーテンソンセンターにおけるアソシエイト・プログラムにおける活動について報告するとともに、その後参加したアメリカ図書館協会（ALA）の今年の内容についても一端をご紹介したい。

### 2. 研修参加の目的と設定課題

私が今年度の私立大学図書館協会による海外派遣研修へと参加したいと考えた理由は、主に以下の3点からである。

第一に、きわめて個人的な事情となるが、これからの図書館職員としての仕事にとって礎となるような経験をしたいと考えたためである。勤務する大学における人事異動により、2013年6月より図書館で勤務するようになった。今年がちょうど3年目の年である。スキルや知識を身につけるという意味で、この機会は貴重な経験となるのではないかと考えた。さらに、研修に参加する各国の図書館員との交流を通じて、所属する大学図書館で勤務することだけでは得られない様々な視点を得ることができるのではないかと期待した。

第二に、現在所属する課における業務の一つである電子資料に関して、米国における図書館の現状と実態について知りたいと考えた。日本と米国との間には、様々な違いもあるが、資料の電子化が一早く進んでいる状況の中で、米国における図書館で電子ジャーナルや電子ブックといった電子資料をどのように管理し、利用者へと提供しているのか、また様々な取り組みの中で日本の大学図書館へと適用できる可能性はないかを検討したいと考えた。

第三に、図書館マネジメントについて米国での取り組みや方法論を適用したり、部分的にでも取り入れることができるかについて関心を持っており、インターネットや図書・雑誌によ

るものではなく、実際の現場を見たり、担当者と話をすることでこのことを考えてみたいと思ったためである。イリノイ大学図書館モーテンソンセンターが提供するプログラムにおいては、様々なテーマに関する講義があり、学内外の様々な施設を見学できることは過去の参加者による報告書から知っており、このことも研修への参加の動機となった。

### 3. モーテンソンセンタープログラムの概要

イリノイ大学図書館モーテンソンセンターは、国際的な図書館の協力関係構築を目的に1991年に設立され、これまで米国外の90ヶ国以上、1,200人以上の図書館員がセンターの提供するプロフェッショナルプログラムに参加してきた。今年のモーテンソンセンターのプログラムには、ナイジェリア（6名）、ブラジル、パキスタン、バルバドス、韓国（各1名）、日本（2名）の計12名が参加した。



今年のモーテンソンセンタープログラム参加者とスタッフの皆さんと。

2015年のプログラム日程と内容については、以下のモーテンソンセンターのWebページより確認することができるので、詳細はそちらを参照していただきたい。

[http://www.library.illinois.edu/mortenson/activities/Old\\_Schedules/2015\\_schedule.pdf](http://www.library.illinois.edu/mortenson/activities/Old_Schedules/2015_schedule.pdf)

### 4. モーテンソンセンタープログラム受講内容に関する報告

#### (1) 講義・ワークショップ

「アメリカにおける学術図書館の動向」について、Paula Kaufmanさん（Inter-rim Director）より報告があった。アメリカの大学図書館もかつての伝統的な図書館の姿から、電子化の流れやユーザーのニーズの変化を受けて、その存在自体が大きく変化してきている。具体的には、エンドユーザーである学生の要求に焦点を当てる傾向が強まっており、図書館の空間をアカデミックコモンズ化したり、GIS (Geographic Information System)のような特定分野のための利用に供したりするようになってきた。大学図書館の

直面している課題は沢山あるが、図書館で働くスタッフ一人一人がよく訓練を受けて時代遅れにならないようにする必要性、そして再考し、さらに想像し、リスクを取る姿勢

(Rethink, reimagine, take risk) の重要性を語られた。図書館の未来を創るのは自分たち自身だと締めくくられたのが印象的であった。

「公共図書館の世界的な動向」と題するプレゼンテーションが、モートンソンセンターの Susan Schnuer さん (Associate Director) よりなされた。世界各地の公共図書館で取り組まれている事例を中心に、IT 化への対応という一方の方向がある中で、地域が抱えるニーズに応える公共図書館の事例が多く紹介された。地域の政府の財政状況が大きく影響するが、どの国や地域でも市民の声に応える工夫がなされているというのが特徴として挙げられる。大学図書館がどちらかと言えば、電子資料を中心とした IT 化への対応と図書館独自の工夫を織り交ぜながらもスペースの有効活用という方向に向かっていく一方で、公共図書館はそれぞれに地域化 (Localization) が進んでいっているように感じた。

イリノイ大学アーバナ・シャンペーン校図書館の館長 (University Librarian and Dean of Libraries) の John Wilkin さんからは、「研究図書館の動向」に関するプレゼンテーションを伺った。近年図書館を取り巻く環境は大きく変化しており、ネットワーク化と情報の共有が進むことで、コレクションについては、大学独自の所蔵以外にもアクセス可能な資料が増大している。Wilkin 氏の前職は Hathitrust のエグゼクティブディレクターで、この活動を通じて、運営コストは参加館やコンソーシアムによって共同負担されながら、1,400 万冊を超える資料がデジタル化されてきた。学習や教育についても、ネットワーク化によって一つの大学を越えて知識が共有される状況へと変化してきた。このような中、空間としての図書館はどのようにあるべきか。家でもなく、研究室等のようなオフィスでもなく、第三の場所としてどのような機能を備えるべきなのか、今まで以上に検討していく必要があるという問いかけが印象的であった。

「マーケティングと唱導 (Marketing and Advocacy)」と題するセッションが、Meg Edwards さん (Advising Coordinator, Graduate School of Library and Information Science) によって行われた。図書館におけるマーケティングというと意外な感じがしたが、図書館の利用者を顧客 (customer) と位置づけ、その顧客によって決定され、常に変化するニーズに図書館側がいかに対応していくべきかというのが、このセッションの主な目的であった。いくつかのステップとそれらの絶え間ないサイクルが、マーケティングを行っていく上での鍵となる。第一のステップは、自分たちのミッション (使命) は何であるかを明確にし、例えば 5 年先を見据えて、どのようなビジョン (目標) をもって業務を進めていくかを定める。これまでの業務をただ単純にこなすだけでなく、変化する顧客ニーズを把握し、ニーズに応じていくために実現すべきことは何であるのか。いわば、組織の到達目標を定めることが重要な点である。それをふまえながら、第二のステップとしては、顧客のニーズを研究することが重要となる。顧客のニーズや満足度を探るためには、様々な分析ツールが存在する。各種調査の他、SWOT 分析 (自身の強み、弱み、機会、脅

威を4つのカテゴリーに分けて分析するマーケティング分析方法)、利用者が図書館で何をしているかを探る環境観察 (environmental scan)、各種の統計やデータの活用などを通じて、顧客である利用者(潜在的な利用者を含めた)の属性や特徴を細かく分析しながら、ミッションやビジョンの再検証を行う。そして第三のステップとしては、図書館内部と外部の環境を整備するための実際の施策の実行が挙げられる。内部としては、スタッフの採用計画とトレーニング、マネジメントへの反映などが挙げられ、外部環境への対応としては、サービスの提供内容と方法、他機関との協力関係、技術やソーシャル・メディアなどの活用方法が想定される。そして、それらを評価 (Assessment) することがとても大事である。Advocacy という言葉は、私にとっては聞きなれない言葉であったが、「個人や組織が様々な立場の人々や組織に対して、意思決定をするにあたって影響を与えるための行動を実際に唱導していくこと」との説明がなされ、理解することができた。変化をもたらす存在 (Change Agent) となることと言い換えてもいいのかもしれない。変化をもたらす主体には、図書館員はもちろん、図書館で働くスタッフや顧客である利用者がその存在になりうる。もちろん立場による職分や責任の違いはあるであろうが、多くの人の変化を意識して仕事をしていくことで、職場はもっと変わるだろうということを考えさせられた。その意味で、このセッションは、私にとって大変実り多いものであった。

「FISH!」という顧客サービス哲学を考えるセッションも実施された。このセッションは、シアトルに実在する Pike Place Fish Market の接客スタイルを実例に、顧客サービスのあるべき姿を考えるものであった。要点としては、Play (笑顔で、かつ自然に、自分のすべき役割を組織の中で果たす)、Make their day (顧客にとって特別な一日と感じるようなことをする)、Be there (顧客と向き合い、face to face の付き合いをする)、Choose your attitude (たとえ自分にとっては何度も受ける質問であったり、毎日繰り返す仕事だとしても、顧客にとっては一度きりの経験になるかもしれない。その意味で自分の態度を吟味すべき) という4つのポイントについて、グループワークや全体での議論を通じて、理解を深めていくというセッションであった。鮮魚市場のチームは皆が快活で、様々な性格の従業員がいるのだが、それぞれの役割を果たすことで結果的に良いチームワークが形成されている。図書館という言わば縦割りの組織では、なかなかチームの一員であるという認識を持つことが少ない現状があるが、同じ業務チームや関係者と、個人に焦点を当てるのではなく、笑顔で快活に、ユーザーにとって何が一番大切なのかを考えながら、仕事に取り組んでいく必要性を考えさせられた。何よりも、まずは自分から変わることが必要であろう。

イリノイ大学図書館における取り組みについては、様々なテーマで報告がなされた。そのうち、資料の保存・修繕に関しては、Jennifer Hain Teper さん (Head of the UIUC Conservation Department)、Josh Harris さん (Media Preservation Coordinator)、Kyle Rimkus さん (Preservation Librarian) の3名より、紙媒体資料、メディア資料、デジタル資料に関する保存と修繕についての紹介があった。イリノイ大学図書館では保存

状態と利用頻度や資料の価値などをもとに、保存と修繕の優先順位を決定しており、当然のことながら資料価値や利用頻度が高く、状態が悪いものから優先して修繕を行うようにしている。紙媒体で一番大きな問題は虫による被害で、破損状況を見ながら様々な方法で修繕を行う。また、メディア資料については、フォーマットが技術の進歩とともに多様となってきたのが最大の特徴であり、各フォーマットに応じた音源や映像の修復を行う取組みが必要となる。デジタル資料についても、特に光学式媒体の破損に伴うデータ消失が大きなウェイトを占めており、それらの保存・修繕についての対策を各種行っているとのことであった。デジタル資料の保存については、技術と組織、そして財源のサポートが整って初めて実現するもので、これらの実現も資料保存のためのライブラリアンの重要な仕事の一つであるとの説明があった。

イリノイ大学図書館のコレクションについて、Tom Teper さん (Associate University Librarian and Collections and Technical Services, Associate Dean of Libraries)、Wendy Shelburne さん (Electronic Resource Librarian)、Mara Thacker さん (South Asian Studies Librarians) の 3 名によるラウンドテーブル形式で、業務説明と質疑応答が行われた。Teper さんからは、Collections and Technical Services についての概略的な説明があった。この部署では、資料の収集と保存、目録の作成といったコレクション管理に関する全般的な業務を担当している。約 1,753 万ドルの全資料購入予算のうち、現在約 71.5% が電子資料の購入に関わるものであり、年々増加する購入費用については頭を悩ませているとのことであった。電子資料については、担当者である Shelburne さんが着任した 12 年前から状況が大幅に変化してきており、現在では電子資料の管理に特化した管理システムは導入せず、図書館の基幹システムである Voyager のモジュールや既存の仕組みを使って管理しているそうである。また、南アジア研究のサブジェクトライブラリアンである Thacker さんからは、特定分野ごとの予算はそれほど大きくなく、収集にあたっては ILL の利用可否や電子資料へのアクセス可否を考慮に入れながら、資料購入の検討を行っているとの説明があった。Shared Print をめぐる動きについては、コンソーシアムである CARLI (Consortium of Academic Research Libraries in Illinois) に加盟する図書館間での I-Share による直接的な貸借システム、CRC、Wiley、Springer などの Journal に関する大学間でのコレクション分担、そして伝統的な ILL による資料の提供によって進められている。また、紙媒体から電子媒体へと切り替える上でのガイドラインを作成し、図書館 WEB から閲覧できる(<http://www.library.illinois.edu/administration/collections/policies/>)。この他、電子資料の値上がりについては出版社側がイニシアティブを取っている点について、Open Access Journal の今後の増加がこうした状況を打開することにもつながるかもしれないとの見解も示された。電子資料の値上がりについては、アメリカをはじめ、どの国でも共通の課題を抱えており、国を越えたより一層の協力関係の構築の必要を感じた。

「学術図書館における評価」というテーマについて、Jen-Chien Yu さん (Coordinator for Library Assessment, University Library) より説明と資料の紹介などがあった。学術

図書館に限らず、もはやどの図書館も財政的な困難を抱えている状況下にあつて、事実に基づく研究や分析の必要性が高まっており、このための評価 (Assessment) の重要性がある。また、消費者である個人が利用する技術によって図書館の利用者の期待が決定される状況においては、利用者が何を期待しているのかを常に把握するように努めなければならない。図書館を取り巻く環境と図書館の活動そのものの評価のためには、統計や調査、評価指標や分析ツール、利用者自身に関する研究を用いることが想定され、それぞれの図書館において、必要な評価のために必要なツールを取捨選択しながら、実施することの重要性が述べられた。コレクションや電子資料、図書館が提供するサービス、スペースについての主な4点について、図書館が評価を行うべきポイントとなるが、どのような方法で、どのような優先順位をもって取り組むかについては、個々の図書館が進めようとする戦略とも関わる。図書館の熱心な利用者からの直接的なリクエストに応じていくことはもちろんのこと、潜在的なユーザーや普段図書館を利用しない学生や教員にも配慮した図書館の活動と今後の戦略を考えていくことが重要である。そのために、データや事実となる統計などを用いたデータ分析の重要性を痛感した。

Open Educational Resources (OER) に関する図書館における比較的新たな取組みについて、Crystal Sheu さん (E-Learning Specialist) と Sarah Crissinger さん (Research and Information Services Graduate Assistant) より、説明があつた。Open Educational Resources (OER) とは、ネット上での共有や改変、適用と改良が可能となすすべての教育資料を意味するもので、すでに多くの教育機関によってシラバスや授業内で使用される PPT 等のスライド資料や配布資料、動画教材などがそれに該当する。テキストにかかる費用の面や図書館の資料購入の面、利用の手軽さや教育上の理由、研究内容の共有などの面でメリットがあるため、OER はすでに様々な教育機関で活用され始めている。図書館がそれに取り組むべき理由としては、一定の専門的なスタッフがいる点やライセンスや著作権、公平な利用といった問題についての専門的なスキルを有している点、また情報リテラシーや機関が持つ知見がこうした対話を促進したり、つなげたりするのに役立つという点が挙げられる。OER の提供サイトとしては、OER Commons や MERLOT、各研究機関が提供する Open Course Ware などがある。図書館としてはそれぞれのサイトや OER の質について配慮しながら、ライセンスの問題、利用するユーザーのレベルや言語に配慮した提供を行うことが求められる。特にライセンスの問題については、資料改変の可否、著作権などの問題を考慮しながら提供し、利用に供する必要がある、提供にあたっては十分な考慮すべきとのことであつた。

研修の初日に行つた DiSC 診断の結果を踏まえたワークショップが、2日間にわたつて行われた。講師は Learning Alliances Company の Shirley N. Stelbrink さんであつた。DiSC は人の特性を示す4つのカテゴリーで、'D'は Dominance (主導)、'i'は Influence (感化)、'S'は Steadiness (安定)、'C'は Conscientiousness (慎重) のそれぞれの頭文字が取られている。それぞれの人の特性を4つのカテゴリーと場合によっては周辺の特性と

のミックスで位置づけ、特に職場や家庭、社会における人間関係と様々な特性を持つ他者とのコミュニケーションについてのワークショップであった。他者を否定したり、変えようとすることなく、自分もストレスを感じることなく職場で落ち着いた安定した状態で過ごす方法の重要性を改めて考えさせる時間となった。また、他者から自分はどう見られているかについて、それぞれの特性別に分析することができたのは興味深かった。



DiSC ワークショップ  
の一コマ。職場におけ  
る個々人の特性に配  
慮した行動について  
学んだ。

## (2) 視察

本研修においては、座学型の研修だけでなく、様々な関連施設へ赴き、見学・視察を行った。そのうちのひとつとして、イリノイ大学と国立スーパーコンピューティングアプリケーションセンター（National Center for Supercomputing Applications:通称「NCSA」）が共同で保有するスーパーコンピューターの設置施設である National Petascale Computing Facilities を見学した。通称 Blue Waters と呼ばれる世界的なスーパーコンピューターは様々な分野の研究に利用され、サンフランシスコ沖地震の解析や AIDS 研究にも活用されている。



【写真左】

National Petascale  
Computing Facilities  
の内部

【写真右】

イリノイ大学図書館  
Main Library のレファ  
レンスカウンター

イリノイ大学アーバナ・シャンペーン校の図書館の見学も行われた。大学図書館は、大学設立と同じ 1867 年に設立され、大学の開学と同じ 1868 年から業務を開始した。当初 1,039 冊から始まった所蔵数は現在、1,200 万冊を超える所蔵数を誇る。参考図書が多く置かれた Study Room や Reference Desk、Stacks などを見学した。こちらの図書館の特徴として興味深かったのは、トルネードの発生時に備えてシェルターが設置されていることであり、ガラスの飛散や強風に巻き込まれないように設置されているとのこと。また、Main Library の 3 階にある International and Area Studies Library も見学し、アメリカ以外の地域研究に関する資料を一堂に集め、研究者や学生に提供しているのが興味深かった。例えば、ロシア・東欧の研究者が中国関係の資料を収集したいと思った時、同じ場所で研究資料を探すことが可能となっている。

図書館情報学研究科、通称「ライブラリースクール」(Graduate School of Library and Information Science) の見学も行った。全米で第一位の評価を誇るライブラリースクールについて、Linda C. Smith 教授と Kate McDowell 准教授からの紹介があった。ライブラリースクールはすでに 121 年の歴史を誇り、米国内外に数千人の卒業生がいる。現在は、修士課程と Certificated Advanced Study (略称 CAS。図書館情報学の修士学位を持つ人向けのより高度な認定プログラム) については、On-campus での講義の他、Online での受講も可能となっている。なお、Ph.D. コースについては On-campus のみである。図書館を取り巻く環境は 21 世紀を迎え、大きく変化してきており、教育内容もバーチャル・レファレンスや RDA、電子資料の取り扱いと電子資料化による保存など、時代の求めに対応するようなコース内容を整えてきている。図書館は社会と密接な関係を持った存在であるため、それぞれのファカルティの専門も幅広く、また多様な背景を持った学生が当スクールに入学しているのが大きな特徴とのことであった。

Grainger Engineering Library の見学も行った。この図書館は Engineering の分野に特化した図書館で、学内の図書館の中でも利用者が多い図書館であった。もちろん紙媒体の資料も提供されていますが、PC の利用を想定したスペースやディスカッションスペースが多く設置された図書館であるのが特徴である。見学を行なったのは夏休み中であったが、月曜から木曜日までは午前 8 時半から午前 2 時まで開館しているとのこと。見学の後、図書館長でもあり、図書館の Faculty の一員でもある William Mischo さんより、イリノイ大学アーバナ・シャンペーン校におけるディスカバリーサービスの取り組み事例について、紹介があった。Bento System という検索結果の統合表示システムを使用しており、表示速度が速いことが利用の理由だということであった。興味深かったのは、イリノイ大学アーバナ・シャンペーン校ではディスカバリーサービスとして Primo を使っているが、検索結果の統合表示で使っているのは EBSCO とのこと。



【写真左】

Grainger Engineering Library の Study room の様子

【写真右】

Undergraduate Library 内の Media Commons フロア。学生の夏休み期間なので、人はまばらであったが、ふだんは人気の場所とのこと。

モーテンソンセンターが入る Undergraduate Library の中にある Media Commons を見学した。この施設は 3 年前に改装され、利用のための PC が設置されていることはもちろん、豊富な DVD や CD などの視聴覚教材、ゲームの貸し出しを行っており、オンラインからも予約可能なディスカッションスペース、録音、録画ブースも提供している。このフロア全体で私語を禁止しておらず、学生たちが個人やグループで自由に議論したり、自分の学習課題について様々なメディアを利用して取り組むことができるようなスペースとなっている。イリノイ大学では主に学部生を対象に、図書館がそのサービスの提供主体となっており、ユーザーである学生へ提供していることが大きな特徴である。



Media Commons に設置されていた会議室を予約するための機械。iPad を活用。

Champaign-Urbana Community Fab Lab を訪れ、施設見学と実習を行った日もあった。この施設は地域に開かれた、コンピュータ技術を活用した技術革新のためのラボスペースで、この Fab Lab のネットワークは世界各地に広がっている。WEB で確認したところ、日本にも数拠点が存在する。ここの Fab Lab では子供たちを集めてのコンピュータを利用したデザインや物品の製作支援活動、地域で起業を志す方々を対象とした商品化のサポートなども行っているそうである。見学では、コンピュータを使った 3 つの作業（コンピュータデザインツールを用いたしおりの作成、CG を利用したデザイン、コンピュータデザインツールを用いてデザインした絵をミシンで布地に縫い付ける作業）を行った。こうした作業を実際に体験して、子供たちにとって、こうした体験が将来の進路選択や関心を伸ばしていくことに大きな意味を持つのではないかということを感じた。実際に自分が考えて、形にしたいと思ったものを手に取れる形にするという作業を通じて、感性や好奇心は大きく刺激されるのではないかと考える。

時にはキャンパスを出て、大学近郊の施設を見学することもあった。キャンパスからバスで 10 分ほどの Champaign Public Library を訪問し、図書館内の見学を行った日もある。この図書館が多く日本の公共図書館と大きく異なるのは、DVD や CD、ゲームなど、図書以外の資料も数多く収集して利用者に提供している点、また電子化が非常に進んでおり、図書館内の各種情報端末の貸し出し（iPad や Kindle、その他タブレット端末など）が積極的に行われている点、また子供・家族向けの図書館主催のイベントが数多く企画されていることであった。利用者のニーズにいかに対応して、サービスを提供していくかを図書館の様々な部署の方が検討し、形にしているのを目の当たりにすることができた。ebook の貸し出しもされていますが、まだ収集の主眼は Print に置かれているようだ。見学している最中、同じタイトルの複本が目立ったため質問したところ、原則として 4 人予約が入るともう 1 冊購入するようにしているとのことであった。



【写真左】

Champaign Public Library  
1階の DVD コーナー。その他、CD やゲームソフトのコーナーが充実している。

【写真右】

Champaign Public Library  
では Check-out(貸出)と Check-in(返却)も機械化が進んでいる。返却後の資料を分別するための機械。

Consortium of Academic and Research Libraries in Illinois (CARLI)の事務局を訪問し、イリノイ州における図書館間の協力関係について学ぶ機会があった。このコンソーシアムは、イリノイ州内の学術・研究図書館によって構成されており、州から大学を經由して CARLI へと投資される金額が全体の 62.7%を占める組織である。特徴としては、日本の JUSTICE のように電子資料に特化したコンソーシアムではなく、I-Share と呼ばれる共同目録システムを提供し、このシステムを利用することで参加館の所蔵状況を確認し、貸出のリクエストを行うことが可能となっている点である。また、このコンソーシアムにおいては、参加館のメンバーを対象に各種のトレーニングシステムが提供されており、域内での担当者同士のノウハウの共有、知識や経験の共有化が進んでいることがわかった。

イリノイ州を出て、バスで片道約 5 時間かけてオハイオ州へのショートトリップに出掛けたこともある。主な目的は、オハイオ州のダブリンに本部がある OCLC の訪問、翌日のオハイオ州立大学 Thompson Library と Westerville Public Library への訪問であった。

OCLC では、Nancy Lensenmayer さん (Program Director, Education/Professional Dev.) より「OCLC : そのミッションとビジョン、サービス」についてのプレゼンテーションがあった。OCLC は 1967 年に当初 Ohio College Library Center として、伝統的なカード式目録の利用に変えてコンピュータによる目録提供を目的としたオハイオ州内の大学間の取り組みとして設立されたが、その後急速に世界中の図書館との協力関係に発展していき、現在の Online Computer Library Center へと組織名を改称した。その間の特徴としては伝統的な図書館の姿から進化した図書館の活動を人々が求めるようになってきたということが挙げられ、旧来の図書館の枠組みを超えたグローバルリーチを持った取り組みが求められるようになってきた。その結果、2014 年会計年度で 113 ヶ国、16,857 のメンバーで構成される組織へと発展した。主なサービスラインとしては、Library

Management、Cataloging & Metadata、End User、Resource Sharing の4つが挙げられ、それぞれのサービスラインの中に WorldShare や WorldCat、WorldCat Discovery Services などの個別の製品が位置づけられる。(詳細については、OCLC ホームページ <http://www.oclc.org/home.en.html> で確認頂くことができる。) また、Question Point というチャットを利用したバーチャルレファレンスサービスのための製品の提供や、OCLC Research という研究部門において次世代の図書館サービスに向けた研究が進められているそうである。

Nancy さんによる説明の後、OCLC Library と Data Center の見学を行った。OCLC Library は OCLC 職員向けに各種資料が提供されており、また過去の資料の展示を行う小規模な Museum の機能も兼ね備えている。デューイによる図書分類法の初版や、かつて使われていた大型のコンピュータ端末などが展示されている。また、職員のリフレッシュのため、チェスボードやパズルも置かれていたのが興味深かった。Data Center は世界4か所にある Data Center のうちの一つであり、ネットワーク上の不具合を24時間体制で各地のデータセンターが監視、対応しているとのこと。サーバールームも案内していただき、かつてよりはかなり小規模になったとのことであったが、日本を含む世界各地とのデータのやり取りを行っている中枢を視察することができた。



【写真左】

OCLC での概要説明中の一コマ。



【写真右】

Ohio State University の Thompson Library の内部の様子。Stacks (書架階層) がガラス越しに見ることができ、美しい造り。

オハイオ州へのフィールドトリップの2日目には、まずオハイオ州立大学(略称は OSU)のメイン図書館である Thompson Library に向かい、概要説明を伺った上で見学に参加した。OSU は全米最大規模の学生数を誇り、2014年秋学期時点で学部生が約4万5千人、大学院生その他が約1万3千人、合計約5万8千人が在籍している。Main Library である Thompson Library は Columbus キャンパス内にある15の図書館のうち、中央図書館の機能を有する図書館であり、1930年に設立され、2009年にリノベーションが完了

したばかりの図書館である。キャンパス中心部に位置しており、学生や教員が図書館を通過して移動できるような設計で、図書館に来館しやすいのが特徴となっている。図書館の西側の入り口付近にはカフェがあり、2009年のリノベーション後の開館以降、食べ物や飲み物に関するポリシーを改め、すべて館内に持ち込み可としたそうであるが、学生の対応はとて良く、ポリシーの変更により本の汚損が目立つようになった事例はないとのこと。改装時に Stacks（書架階層）をリノベーションし、ガラス張りの建物内部から書架が見える形に改装され、自然光が館内に沢山入る明るい図書館であった。レファレンスルームは、1960年代に書架スペースの問題で半分の高さにしたそうだが、またリノベーション時に元の高さに戻し、とてもゆったりとしたスペースとなっていた。

Thompson Library のツアーから戻った後、現在計画中の Research Commons について、Joshua W. Sadvari さん（Research Commons Program Manager & GIS Specialist）より計画概要の紹介があった。この Research Commons は、研究のライフサイクル支援を目標に、協力的かつ学際的な研究のハブ的な場所となることを目標に、大学図書館の他、研究支援オフィスやキャンパス内の様々な支援部署で連携して進めているプロジェクトであり、2016年1月の開設を目標に、計画を進めている。この Research Commons にはセミナーや講演会の会場となるスペースの他、グループ学習室、展示スペース、デジタルビジュアライゼーションスペース、ブレインストーミングのための部屋、教室、コンピュータラボなどが入る予定とのこと。

その後、Westerville Public Library の視察を行った。Don W. Barlow さん（Executive Director）による概要説明の後、ツアーが行われました。この公共図書館の一番の特徴は、利用者が真に求めていることは何かを特に追求して、様々な取り組みを行っている図書館の一つだということであろう。中でも興味深かったのは、いわゆるドライブスルー形式（この図書館では、'Drive-up Window'と呼んでいる仕組み）で本が返却・貸出できる仕組みを導入しており、利用者の利便性を追求していくとこのような形になるのかと感じた次第である。また、利用者に対しての技術的な支援体制、具体的には iPhone ユーザーが多いことをふまえたアプリ設定、サービスの提供が行われており、IT 利用に関する支援体制が充実しているのも特徴。館長からの説明で特に印象に残っているのは、図書館で働くスタッフの採用に際しても、常に現状維持に挑戦する、異なる意見を持った人を歓迎するということであった。また、館内の至る所に「私たちが大切だと考える個人的な感覚は、顧客の感覚にマッチしなければ意味がないことだ。」という標語が掲げられており、顧客ニーズに常に敏感である必要性を様々な形で訴えていることが印象的であった。

このフィールドトリップとは別日程で、バスで片道約3時間のシカゴへのショートトリップに出掛けたこともあった。はじめに Upshot. Agency というマーケティング会社を訪問し、副社長であり、Market Intelligence Services の責任者でもある Liz Aviles さんより、会社の紹介と事業の紹介などがあった。Aviles さん自身はライブラリースクール出身で、現在の業務も、クライアントの新規事業のための調査・サービス提供、消費者や業

界のトレンドレポートの作成、カレントアウェアネス（業界や企業を取り巻く最新情報）の提供などという点で、図書館で働くライブラリアンに通じる仕事であるとのことであった。伝統や習慣ではなく戦略的な視点を持って、組織における優先順位をつけながら、柔軟かつ個人が確かな強みを持った仕事をしていくことの重要性を学ぶことができた。

その後、アメリカ図書館協会（ALA）本部を訪問し、Michael Dowling さん（Director, International Relations Office）より協会の概要についての説明を伺った。ALA は 1876 年にペンシルベニア州のフィラデルフィアで設立され、すべての人に開かれた組織であり、57,000 人を超える構成員のほとんどは図書館員によって構成されている。北米に約 60 あるライブラリースクールのプログラムについての監督的な立場を担うと同時に、海外の図書館情報学に関する授業で提供された単位の認定についての判断も行っている。ALA は個々の図書館の運営について指導する立場にはないけれども、助言を行う機関としての位置づけとなっている。ALA は約 250 人のスタッフを有しており、本部があるシカゴの他、ワシントン DC とコネチカット州に事務所がある。ワシントン DC 事務所は米国議会や政府機関へのロビー活動の窓口となっています。収入のうち、会費が占める割合は約 20% であり、約 40% は広告収入、約 20% が会議等による収入、残りの約 20% がその他となっている。その後、Barbara M. Jones さん（Director, Office for Intellectual Freedom）より、ALA が取り組んでいる読む権利や知る権利をめぐる活動についての活動について紹介があった。世界各地で出版や図書館での配架を制限する動きに対して、ALA は反対の立場を明確にしている。説明の中では、図書館での閲覧に制限があった図書や出版が差し止めになったものについて紹介があった。日本各地の図書館で『はだしのゲン』を閉架書庫へ移動した出来事についても触れられ、図書館の自由や読む権利を阻害することに反対することは ALA のミッションであるということが述べられた。その後、ALA 本部内を見学し、Young Adult Library Services Association（YALSA）、America Association of School Librarian（AASL）、Association of College & Research Libraries（ACRL）の部署を見学した。



【写真左】

ALA 内で編集している Booklist のこれまでの号の表紙が飾られていた。周りには書評に使われる図書が乗ったブックトラックがたくさん。

【写真右】

DePaul University 図書館のラーニングcommons。

その後はバスで、DePaul University へ移動し図書館を訪問した。DePaul University は 1898 年に創設されたカトリック系の私立大学で、カトリック系の大学では全米最大規模の大学である。キャンパスはシカゴ市内のいくつかの場所に分散しているが、今回訪れたのは中心部からやや北にある Lincoln Park Campus にある The John T. Richardson Library である。2013 年に改築が完了し、図書館の 1 階部分にはラーニングcommonsや共同作業スペース (Collaborative Workspace)、Scholar's Lab などが設置されている。ラーニングcommonsでは学生がグループで PC を見ながらディスカッションをしている光景を見ることができた。3 階には貴重書庫があり、利用者は入ることができない閉架書庫にも入れて頂くことができた。貴重書については、電子化を進めているそうだが、まだまだその数は限られるとのこと。イリノイ大学と同じく、利用頻度や資料の価値などを考慮しながら、今後も電子化の作業を進めていくとのことであった。

見学の後はフリーな時間となったため、メジャーリーグの観戦に出掛けたり、街の中心にある Millennium Park を歩いたり、夕食では有名なシカゴ・ピザを食べた。また翌日には、グループでシカゴの市内観光を行い、全米で 2 番目に高い Willis Tower (1 位は 5 月下旬に展望台がオープンした One World Trade Center) の展望台に上ったり、市内を流れる Chicago River をボートで巡りながら建築物を見学するリバークルーズに参加した。シカゴはアメリカでニューヨーク、ロサンゼルスに次ぐ大きな都市ですが、その一端を 2 日間という日程の中で垣間見ることができた。

### (3) 各種イベント・個人的な交流など

モータンソンセンターが提供するアソシエイツ・プログラムには、イリノイ大学図書館で働くライブラリアンをそれぞれの Library Friend として設定していただき、直接話を伺うことができるシステムがある。私の Library Friend は Steve Witt さん (Head, International

and Area Studies Library) で、Library Administration の准教授でもいらっしゃる方であった。日本資料に関する選書などを担当されており、日本で教えておられたこともあるそうで、そのご縁で私の Library Friend として設定されたのではないかと思われる。ランチをご一緒してお仕事のことや、大学野球のこと、アメリカや日本での生活のことなど、様々なことをざっくばらんにお話しすることができ、楽しいひと時であった。

とある週末には、モーテンソンセンターの Associate Director である Susan さんから自宅でのホームパーティにご招待いただき、Associate のメンバーや図書館の Librarian の方々が集まる機会となった。大学からバスで 30 分くらいの所にあるお宅で、あいにくの雨ではあったが、いわゆるアメリカの家庭の手作り感溢れるホームパーティで、Associate 同士で美味しい食事と飲み物を頂きながら歓談したり、館長やモーテンソンセンターの新ディレクターをはじめとする Librarian の方々とお話ししたりして、あっという間に時間が過ぎていった。Susan さんのお宅は庭のすぐ先が広い公園となっていて、緑が豊かな素敵なお宅であった。日本の浮世絵が飾られていたのでお伺いしたところ、日本のご友人の方がくださったのだとか。モーテンソンセンターはすでに述べたように図書館同士の国際交流を目的にイリノイ大学に設置されたセンターであるが、Susan さんのお宅の中にはそのことを示すような沢山の色々な国の文物が飾られていたのが印象的であった。

## 5. アメリカ図書館協会 (ALA) 年次大会参加に関する報告

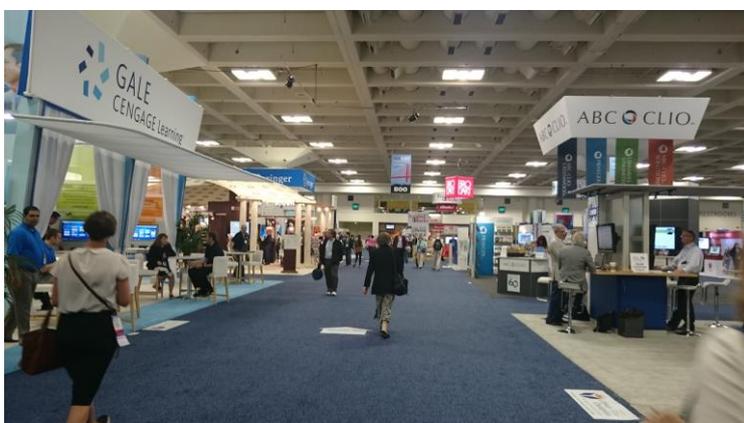
イリノイでのモーテンソンセンタープログラム受講の後、シカゴのオヘア空港経由で西海岸のサンフランシスコへ移動し、ALA (アメリカ図書館協会) の年次大会に参加した。今年の ALA 年次大会への参加も、私立大学図書館協会による派遣で実現したものである。今回で 134 回目の歴史ある大会であり、サンフランシスコ市の中心部にある Moscone Convention Center がメイン会場で開催された。各種セッションとブース展示が行われ、その他ダウンタウンにあるいくつかのホテルでセッションが開催された。



ALA で参加したセッションの一つ。作家による講演の他、その年に活躍した図書館、ライブラリアンの表彰などがあった。

私は主に、Discovery Service やその周辺モジュールに関するセッションや、図書館を取り巻く環境に関するセッションに参加しながら、各団体・企業が出展している展示ブース

を回った。WorldCat Discovery についてのユーザーの意見も伺うことができ、Metadata に代わる新たな Web サービスの仕組みである Linked Data やデータ分析の取組みについて、OCLC が米国議会図書館や Google などと連携しながら、研究や機能充実を図っている現状を知ることができた。展示ブースでは、OCLC や Innovative、JSTOR を始め、大手出版社のブースなどを中心に回りました。また、日本の図書館総合展と違う大きな特徴は、作家が出版社のブースを訪れ、自身の著作にサインをしている光景である。何か行列があるなと思って眺めていると、食べ物の無料提供サービスか、著者によるサインのサービスに多くの人が並んでいるという印象である。24 時間の図書館サービスのためのマシン（日本にもあるレンタル DVD などのサービスマシンのようなもの）なども展示されていた。



ALA の展示ブースの様子。各出版社、ベンダーなどのブースでは個別のセッションや作家によるサイン会などが行われていた。

ALA の最終日前夜には、海外からの図書館員向けにレセプションが開催され、こちらに参加した。ALA メイン会場の Moscone Convention Center からバスで San Francisco Public Library へと移動し、レセプションへと参加した。残念ながら、日本からの図書館員には会うことができなかったが、エジプトやオーストリア、メキシコシティなどからの図書館員、台北からのベンダー担当者と交流を図ることができた。また、イリノイ大学モーテンソンセンターの Susan Schnuer さんやナイジェリアからの Associate の 2 名にも、この場で再会することができた。ALA の会場では稀にではあったが、日本人の一行に遭遇することもあったが、こうしたレセプションに参加しないのはとても残念である。今回一貫して感じたのは、国際的な図書館員との交流の場での日本の存在感の小さなことであった。自分の姿勢も含めて、今後の課題として考えておきたい。

## 6. おわりに

私立大学図書館協会派遣によるイリノイ大学図書館モーテンソンセンターと ALA 年次大会への派遣、それに加えて所属大学における人事研修制度を利用して、今回 3 ヶ月にわたり米国に滞在した。人生初となる米国への渡航、かつ一人での海外生活は、多くの期待と楽しみの反面、それと同じかそれ以上の不安が当初あった。渡航後はその不安を忘れてしまう

ほど、日々の密度が濃く、充実した日々を送ることができた。その中でも何よりも収穫であったのは、日本における大学図書館勤務だけでは体験することのできない、米国における図書館を取り巻く環境を肌で感じることもできたこと、またそれらの中で働く人々の思いや実際の行動に触れることができたことである。

そのうちの一つのエピソードとして、イリノイ大学滞在中の経験を思い出す。Library Friend の Steve Witt さんにランチに連れて行ってもらった帰り道の車中、「図書館の予算に制約があるのは米国も日本も同じであるはずなのに、どうしてアメリカでは次々と図書館に新たな仕組みが導入されているのだろうか」と聞いてみた。Steve さんは、すぐに「何ができるのか、過去の経緯や今の仕組みに捕らわれることをなるべく排除して、新しい発想で対処しようとするマインドを持った人間が多いからじゃないかな」と答えた。現状における制約を前提条件とするのではなく、何ができるのか、どうすればより良くなるのかを考えるマインドを持っていると感じた次第である。

日本の図書館を取り巻く環境は言うまでもなく厳しい。大学図書館でも、公共図書館においても、従来の図書館の運営方法に捕らわれず、民間企業との協力や業務委託といった形で新しい発想や方法を導入しようと試みたりしている。ただ、どんな時でも重要だと思うのは、自らの頭で考え、自らの手や足を使って動き、図書館という空間（実際の物理的な空間だけでなく、ネットワーク空間も含めて）を利用するユーザーに喜ばれる存在になるにはどうしたらよいかという思いではないだろうか。今回の米国研修を通して、今後も図書館で働く一人として、過去や現状を無批判に踏襲しながら仕事をするのではなく、日々新たな視点で業務に取り組んでいくことの重要性を体験することができた。

拙稿の最後となりますが、今回私を派遣して下さった私立大学図書館協会、中でも昨春秋の応募の段階から選考の過程、派遣決定後に実務的な支援をして下さった国際図書館協力委員会の委員各位と事務局の皆様に深く御礼申し上げます。また、年度初めの4月から3ヶ月にも及ぶ長期間にわたって研修に参加することを快諾頂き、研修期間中も事あるごとに応援して下さった早稲田大学図書館資料管理課の同僚の皆さんにも、この場を借りて御礼申し上げます。ありがとうございました。